

雁を聞く  
(韋応物)

故園渺何處 歸思方悠哉  
淮南秋雨夜 高齋聞雁來

故園 渺として 何れの 処ぞ

解説 韋応物が雁の囁き声を聞いて故郷を思つて作つた詩である。

歸思 方に 悠なる 哉

語釈 ※故園||故郷。 ※渺||はるかに遠いこと。 ※歸思||故郷に帰りたい気持ち。 \*悠哉||思う心の長くしてつきないこと。「悠々」という意と同じ。 ※淮南||淮水の南。 ※高齋||高殿にある書齋。 郡の太守(長官)の官舎の書齋。

淮南 秋雨の 夜

通釈 わが故郷長安はどこだろうと眺めるが、遙かに隔つていて見えない。帰りたいと願う気持ちが切々と迫り、つきない。この淮水の南

高齋 雁の 来るを 聞く

の地で、秋雨がさびしく降りしきる夜、わが住む屋敷の書齋で雁の渡つて行く声を聞くと、いよいよ望郷の念がわき起こる。